ときの話題

足元からの農業・農村理解を

北海道大学教育学部　助教授
鈴木　敏正

ウルグアイ・ラウンドの「決着」

一九九三年十二月十四日、七年間にわたって新しい世界貿易のルールづくりをめざしてきたガットのウルグアイ・ラウンド（新多角的貿易交渉）は決着し、翌日には最終案が採択されることとなった。この合意に先だって細川首相は、新ラウンドを受け入れ、米の部分開放を閣議決定したむねの記者会見を行っている。

もちろん、これは戦後最悪の冷害、食用米の緊急輸入に次ぐトリプル・ショックというだけではすまない、構造的な変動を日本農業に与える問題である。米のニュースに隠れているが、新たに関税化する麦と乳製品、さらに関税率を下げることになる牛肉とオレンジなどは、とりわけ北海道の農業に深刻な影響をもたらすことが予測される。やりきれないのは、米の問題で日本政府がいかにがんばったかということもさりながら、農業分野全体、そして新しい貿易秩序に対して細川内閣が国民に理解できるような明確な態度と方針をなんら示しえなかったということである。同じ自由化でも、新国際経済秩序における日本の立場と役割がはっきりとしているならば、多少ともみずからなぐさめることができるのだが。

今回の合意案は、九一年末に提示されたドンケル案にはじまるもので、単にモノの貿易にとどまらず、サービスや知的財産権、貿易関連投資措置などにおよぶ包括的なものであった。それは「冷戦後ガット」と言われるように、アメリカを主導とする戦後世界貿易体制の大きな転換点であった。しかるにこの間、日本政府は新国際経済秩序の中でいかなる方向をとるか、そこに農業を、米をいかに位置づけるかを示し得なかったのである。

新国際経済秩序と多元的文化の時代

今回のウルグアイ・ラウンドの「決着」は、最近のアメリカやヨーロッパで高まる新保護主義やブロック経済化に対する自由貿易主義の勝利という理解もできる。しかし、自由貿易主義を押し進めればそれでよいのかといえば、決してそうではない。

世界の南北問題、旧社会主義諸国の経済の再建、民族問題、地球環境の問題など自由貿易主義だけでは解決できない諸問題が明確になってきたことも、この七年間で明らかになってきたことである。それらの問題は、子どもを含むすべての個人から、地域、民族と国家の

自立と「自己決定」権を認めることが、議論の前提であるということに行き着く。

新国際経済秩序の基本的課題は、世界における地域と諸民族・国家の自立と相互依存の体制をいかに作り上げていくかにある。それは自由貿易主義の理念だけでは実現しえないのである。

農業・農村が育ててきた多様な価値を国際的に理解していくことが重要となっている。それは総合的な経済性や安全保障、食糧の固有な価値や環境問題にとどまらず、文化的価値にまでおよぶ。そうした理解を共通にしていくためには長期間にわたる努力を必要とする。その中で、とりわけ今後の北海道において重要となると思われるのは、農業・農村を基盤とした地域文化の創造である。

農業の論理と陶芸の論理

衣食住にかかわる生活文化を基盤にして、地域文化を創造する契機は無限に存在するし、現実に北海道各地でそうした取り組みがなされている。市街地の住民が、みずからの生活が地域農業を基盤に成り立っていることを理解するような学習活動も必要である。さらに重要なことは、文化・芸術活動をしている人々と農村住民が農業・農村の価値を共有することである。

ここで道東のB町で陶芸活動をしているSさんを紹介しよう。Sさんは、高校卒業後、内地の窯元で七年間の修行を積んでから、農家である実家に帰り、車庫を父から借りて窯を開く。

土も釉薬も最低気温十度は必要という陶芸活動を、冬場でも続けられるようにするのは並大抵の努力ではなかった。土は近隣の土管工場から購入して精製する。釉薬には、麦・米あるいはリラなどからできた灰を利用する。「ろくろ」は農業機械を改良したものだ。

しかし、全道レベルの展覧会に入選したころから、地元の新聞・テレビでもとりあげられ、デパートやホテルからも注文がくるようになった。S氏は、純粋な作家活動というよりも、食器を中心とした民芸陶器あるいは量産陶器という方向に展開していく。そして一時は職人二人、パート二人までかかえるようになり、全国的販売をも目指すようになった。

それは、S氏自身は製作活動をするよりも、営業や渉外の仕事が中心となっていくことを意味した。次第に余裕がなくなっていった。しかし、販売のための費用や職人・パートに支払う賃金を考えれば、忙しくなるほどにもうかるものではなかった。

そこでS氏の転換がはじまる。地域に密着した活動をしよう。コストをかけて出荷するよりも、自分にしか、ここでしかできないものを創って「人にきてもらう」ほうが、付加価値は高まるし費用は減少するはずだ。製作活動も地域活動もできる。道東は観光地でもあるから、人は全国からもあつまる。

地域文化の創造と農業・農村

S氏のたどった道は戦後の日本農業がたどってきた道と共通のものであるといえはしまいか。彼はいま、地元での理解者をつくること、とくにこれからの若い世代への働きかけに力を注いでいる。

成人講座の講師をし、婦人学級にでかけ、小学校の特別授業で陶芸を教えているS氏の地域住民をみる目はあたたかく、かつ鋭い。大人は「いいかたち」をつくろうとして現実の自分の力とのギャップにいらだつが、子どもは「自分の力でつくろうとする」から一所懸命で、製作活動をする上でも参考になる。こうした活動は彼にとって、地域住民とつきあい、「人間の勉強」をするチャンスである。

S氏のような農村の理解者をひとりでも多くつくることが、長い目でみて農業・農村の基盤を強固にすることになるのではなかろうか。